

大学生のためのキャリアデザイン(人生設計)と キャリア・カウンセリングの社会的意義

中 村 博

概要

大学生にとって何故、今、キャリアデザイン(人生設計)とキャリア・カウンセリングが必要とされるのか、これらの問題提起と解決策について私見を基に論じていきたい。

福山大学においては初年次教育として、1年生全員が履修する必修科目「キャリアデザインⅠ」が存在し、その授業目標は「人間力(豊かな人間性)の育成と、「社会人基礎力」の研鑽を積むことにある。

福山大学は、「信頼と愛に基づく人間関係を育む(心情と愛の教育)、人の生命を尊重し自然を畏敬する(人間と自然を尊ぶ教育)、理論と実践をつなげる(知行合一の教育)により、豊かな人間性を基盤に調和のとれた人格陶冶を目指す「全人教育」を教育理念としており、入学初年次の全学必修科目「キャリアデザインⅠ」は、この教育理念を念頭に開講されている。

「キャリアデザインⅠ」の授業においては、文部科学省の助成金で作成した教科書を有効に活用し、系統的キャリア教育の講義を基本とし、担当教員のこれまでの国内外におけるキャリア・経験から、上述の教育理念に沿う学修内容も取り入れ、さらに、アクティブラーニングとして、学生の主体性・モチベーション高揚のために、対話形式、事例研究、質疑応答、各自学生のWORKに基づく自己のプレゼンテーション、グループディスカッション、模擬面接等を積極的に導入している。その結果、自己の「生き方」がこれまでの高校生活や大学入学当初の期間と比較し、従来のただ無意味に流されるライフスタイルから、毎日が目的意識を持った有意義な時間の使い方にみまると変化していき、自分自身でも驚くほど自己実現への道を歩み始めた事に、ほぼ全員の学生が喜びを感じている姿が顕在化している。上記の事柄は、平成29年度本学の前期定期試験(以下、H29前期定期試験)において、経済学部の「キャリアデザインⅠ」の試験を受験した、経済学部1年生(約261人)の答案用紙からも検証できる。

このH29前期定期試験の結果から、次の事柄が理解できる。従来の高校までの学校生活においては、学校での学びが将来どのように社会で役立つのかという視点の教育はなく、故に、これまで自己の将来像や「自分を知る」事の大切さを考えたこともない大学1年生の姿が浮き彫りとなっている。そして、「キャリアデザインⅠ」を受講後、一人前の社会人になるために大学時代に何をなすべきか自問自答した事、“Time is Money.”(時は金

なり)の如く、これからの有限な大学生活で自己の未来への道をどのように創るのか、自己の貴重な人生にとって本質的に何が大切で何をなすべきか、今後、PDCA サイクルを活用し小さな目標から着実に達成させていく事の肝要などを自覚できた事が、ほぼ学生全員の H29 前期定期試験の答案用紙に、真摯に且つ意欲的に記されている。

この授業目標の成果が問われる H29 前期定期試験において、約 261 人の学生が解答した論述内容についての事実が、「大学生のためのキャリアデザインの社会的意義」の証左といえる。

一方、キャリア・カウンセリングは、クライアントである学生に就職活動に関する単なる指導・相談や、職業についての紹介・斡旋など、テクニカルな就職支援を行う事ではない。学生の抱えている現在の迷いや将来への不安、そして、これまでの境遇や、現在おかれている環境などについて、「傾聴」の姿勢をもって学生の心にしっかりと寄り添う形で、先ずは、全面的に学生を受け入れ、親身になって相談にのってあげることで、そこに芽生えるお互いのラ・ポール(信頼)に基づき、学生の物事への前向きな考え方、主体性・積極性を、学生の潜在意識の中から主体的に引き出すことにある。

この「個を大切にする」キャリア・カウンセリングの効能を、講義やゼミ授業に活かすことにより生じる相乗効果(学生と教師との信頼)が、社会が求める、そして、前述の福山大学の教育理念でもある「全人教育」につながる社会的意義といえよう。

キーワード：自己の将来像への夢・目標、スピリット・イノベーション(自己の意識改革)、能動的キャリアデザイン(人生設計)、アクティブラーニング、パーソナリティー理論、女子学生のキャリアデザイン、キャリア・カウンセリング

1. はじめに

なぜ今、福山大学においては初年次教育として、「キャリアデザイン I」を 1 年生全員の必修科目にしているのだろうか。そこには、18 歳人口減少の影響により、2008 年春に「大学全入時代」が到来し、本学のみならず日本の多くの大学が入学生の確保に奔走している現在の社会環境がある。その結果、大学は入学してくる学生の多様性の課題に直面している。彼らの大半は、自己の将来像への明確な目標を持っておらず、大学時代に何を学修すべきか目的意識もないままに、取りあえずモラトリアム(猶予期間)として大学に入ってから何かが見つかるであろうとの、受け身の姿勢で入学してくる者も多いので、大学としてはこのような学生への対応が大きな課題となっている現実がある。

そして、21 世紀の今日、世界がグローバル化へ著しく進行していく最中、これまで日本の地域社会において若者が抱えてきた「価値観」や「考え方」が、このグローバル化していく世界におい

ては必ずしも通用しない時代が到来している事が指摘できる。

このような時代背景から、平成 29 年度に福山大学経済学部に入學した 1 年生にとって必須のことは、彼らが自己の生涯を「キャリアの積み重ね」、即ち「ライフ・キャリア」として把握し、キャリアとは大学、家庭、社会、人生におけるそれぞれの役割の全てであり、卒業後の職業・キャリア選択については、学生個人の望みを満たすことだけではなく、「自己と社会の双方に存在意義をもたらす仕事」として洞察する事が重要であり、そして、これからの学生個人のキャリア選択とその連続性は、自己の「生き方」と人生の充実度に大きな影響を与えるというキャリアデザインの本質を、福山大学の必修科目「キャリアデザイン I」の授業を通してしっかりと学修し、受講生全員が自分自身で主体的に自覚してもらうことである。

本論文では、グローバル化時代への推移とともに、「生き方」や価値観の多様化している学生が、どのように能動的にこの「キャリアデザイン I」の講義に取り組むことが、自己の将来像への夢・目標に向かって主体的にキャリアを構築していくことにつながるのか、そのために自己の意識改革(スピリット・イノベーション)を礎に、どのように PDCA サイクルやキャリア・カウンセリングを活用し、学内外でどのような活動に挑戦し続ける事が、大学時代に自己の豊かな人間形成を成し遂げていくことにつながるのかということの問題提起し、その処方箋について論じていきたい。

2. 「キャリアデザイン I」の初回の授業で何を学ぶのか

H29 前期定期試験で「キャリアデザイン I」を受験した学生の解答からは、ほぼ全員の学生が以下のキャリア教育の本質を把握できたことが分かる。

「キャリアをデザインする」とは、「なりたい自分(目標)」と「いまの自分(現状)」を認識し、「現状」から「目標」に辿り着くための道筋や手段を考えていくこと。キャリアデザインには 3 つのステップがあり、第 1 ステップは「いまの自分」を把握すること。自分の強みや弱み、自分らしさとは何か? 冷静に分析していく。第 2 ステップは「なりたい自分」を見つけること。自分は何がやりたいのか? 自分は何に向いているのか? 大学生活で少しずつ見つけていこう。第 3 ステップは、現状から目標への手段を見つけ、道筋を設計すること。これは大学の学びの中でも自然に実践できる。

まずは、キャリアデザインの 3 ステップを意識し行動を起こそう。明確な目標を持って大学 4 年間を送る人とそうでない人とでは、卒業時に想像以上の差がつくはず。

キャリアデザインは自立の第一歩である。高校生から大学生になった初年次の学生は、自分の自由時間がふえていることに気がつく。大学で何を学び、どのような活動をするかは、すべて自分で自由に決めることができる。大学生活を楽しむには何をすればいいのか、将来につながる活動とは何かなど、自分自身で考え、行動することで大学生活はどんどん充実していく。これが自立した大人への第一歩となり、将来必ず社会で活かされる。このプロセスこそが、キャリアデザ

インである。¹

3. 自己のキャリアデザインで磨きたい能力

H29 前期定期試験で「キャリアデザイン I」を受験した学生の解答から、学生が自己のキャリアデザインで磨きたい能力として、以下のものを挙げている。

1. 良好な人間関係を形成する能力、そのためのコミュニケーション能力を身につけたい。クラブ・サークル・ボランティア・インターンシップ、アルバイトに積極的に参加して、様々な人々との出会いを通じ、「傾聴」の姿勢も身につけたい。
2. 卒業後の職業を意識して、就職活動を有利に進めるために、必要となる資格の取得を目指したい。例えば、金融業界であれば、証券外務員、日商簿記 2 級・3 級、融資業務に役立つ FP (フィナンシャル・プランナー) 等に挑戦したい。
また、社会人基礎力を培う、ビジネス能力検定試験の資格取得を目標に、今年度から「キャリアデザイン I」の授業の一部として、その試験対策も導入されているので、是非、受験して合格したい。
3. これまでは漠然と高校、中学の教員になりたいと思っていたが、その目標を成し遂げるためには何が必要で何が不必要か分からなかった。しかし、この授業を受けてから、教師になるためには、生徒に自分で考えさせ自分で発言できる能力を身につけさせるために、一人一人の生徒に熱く接し、教育・指導できる能力が必要である事が分かり、このような教師としての人と熱く接する能力を大学時代に磨きたい。併せて、一人一人の生徒の心理が分かる心理学も学びたい。このように、「キャリアデザイン I」の授業を受けてから、自分の考え方が 180 度変わった。本当に感謝している。
4. 自分はプロのサッカー選手になりたいと考えている。自分は今までは、ただサッカーをやっ
て、サッカーが上手だとプロになれると思っていた。しかし、この授業を通して、一人の大人としての質を高めなければ、社会人としても通用しないし、そんな人間では人の上に立ってプレーするプロにはなれないと思った。この授業の教官から学んだ、何事にも一つ一つ丁寧に取り組む姿への気づきを無駄にすることなく、大学 4 年間でしっかりと人間として成長し、結果を出して、夢であるプロのサッカー選手になりたいと思う。
5. 当初、「キャリアデザイン」とは何のことかさっぱり分からなかったが、この講義をきっかけに自分は「キャリアデザイン」について深く理解し、将来について考える事ができた。将来の目標は証券会社に入り、会社にとって社会にとってキーマンになること。そのためには証

¹ 福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career Design Note 1 Fukuyama University』福山大学キャリア形成支援センター, P.3.

券会社の業務に必要な資格を取得し、好ましい人間関係と情報網を大学で構築する能力が重要である。この講義でPDCAサイクルの話を聞いて非常に強い感銘を受けた。これまで自分がやってきたことで、うまくいったと思えるものは、全てこのPDCAサイクルが公式のように当てはまっていたからである。一つ心残りがあるのは、模範的なグループディスカッションに参加できず、参加できた学生は生き生きと自分の考えを活発に発言しており、とても羨ましく思っている。他人の意見を尊重し、皆で問題の解決策を建設的に導き出す、グループディスカッションの能力を磨きたい。

4. 大学時代に身につけるべき、社会が求める力

今、日本社会は卒業後に社会で働く大学生に何を期待しているのであろうか。その手掛かりは、日本独特の企業の新卒一括採用に見ることができる。この採用方法の特徴の一つは、学生の大学時代の過ごし方を知ることで、入社後、どのような能力を発揮し、企業の一員として周囲と協力しながら企業の業績目標を達成していくために、社員として成長への可能性を持っているかを予測し、採用の可否を判断していることである。実際に、エントリーシート、履歴書等の書類審査、面接試験などにおいて、「学生時代に最も専念できたことは何ですか」という質問がよく出されるが、この問いを糸口に、学生の大学生活の充実度を知り、学業の他、クラブ・サークル・ボランティア・インターンシップ、アルバイト等で、どれほどの知識、技能、態度を身につける事ができたのか、一人前の社会人に育つ基礎的能力を把握したいからである。

経済産業省が中心となり2006年に取りまとめた「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」の3つの能力(12の能力要素)で構成される。

12の能力要素とは、前に踏み出す力が主体性・働きかけ力・実行力、考え抜く力が課題発見力・計画力・創造力、チームで働く力が発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力である。²

上記の社会人基礎力を念頭に、福山大学の「キャリアデザインI」の授業では、大学生活で鍛えるべき「社会で必要な力」の一例として、人間関係をうまく形成する「コミュニケーション能力」、自分のおかれた状況を把握し、行動を起こす手がかりをつかむ「情報収集力」、問題解決の方法を考え実行する「創造力/論理的思考力」を挙げている。

そしてアクティブラーニングを活かす形で、学生の主体性・モチベーション高揚のために、社会で役立つ大学の学びについて教員と学生が対話を行い、教員のゼミ生を中心とする先輩学生達

² 長尾博暢ほか(2016),『大学生のためのキャリアガイドブック Ver.2』北大路書房, pp.36-37.

のキャリア構築の事例を研究し、授業の節目ごとに教員が学生にキャリアデザインの本質にかかわる問いを発し、質疑応答も活発に行い、さらに、教科書に沿った WORK に基づく各学生のプレゼンテーション、並びに、担当教員の指導に基づき、応募で選抜された模範グループの学生達の全員が一体となってリハーサルをこなした後に、その学生達が主体的・積極的に、全受講生の前で模範演技を披露するグループディスカッションなどを果敢に展開している。

5. 大学の学びと社会とのつながりを意識しよう

大学の授業は高校時代と大きく異なる。自主的に進めていく大学の学びは、学問自体だけでなく、学問への取り組み方を身につけることにも意義がある。これは社会で働く際の課題解決にも通じる。故に、社会で活用できる学び方を意識すべきである。

自主的に取り組む大学の学びは、高校時代の受動的な学びと大きく異なる。まず、知的好奇心を常に持てるよう心掛け、疑問に思うことや興味がわくことを自ら能動的に調べ、試行錯誤しながら学修しなくてはならない。答えは一つとは限らず、容易には見いだせない。重要なことは、答えに到達する過程で学修する姿勢や手段を身につけ、自分自身の考え方で課題解決への取り組みができるようになることである。このようにして備わった自らの能力は、将来社会で働く際に必ず活かせることを納得し、自己の人間の成長のために、日々研鑽を積む事が求められる。

H29 前期定期試験で「キャリアデザイン I」を受験した学生の解答から、学生が大学の学びと社会とのつながりをどのように意識しているか紹介したい。

1. どんな頭の良い大学に行っても、結局は自分自身が夢や目標のために勉強して、努力して、着実にステップアップしていくことが大切であり、自分の職業選択の幅を広げるためにも資格や検定を取得することも大事だと思う。「キャリアデザイン I」の授業では、学生一人一人の未来のために、担当教員がただテキスト通りの講義を行うのではなく、夢が叶った福山大学の先輩方の経験談や、教員自身の経験談を親身に教えてもらい、こういう教員の熱心な姿に勇気を沢山もらった。自分は「PDCA サイクル」を自己の将来像のモットーにしていきたい。そして次は「なりたい自分」を見つける事が大切。自分は何になりたいのか、何故その職業につきたいのか、を大学生活で見つけたい。最後に現状から目標までの手段を見つけ、道筋を設計したい。
2. 私はこれまで夢・目標も特に持たず、本当に流されて今まで生きてきた。しかし、この授業で沢山のことを学び、その中で特に心に残っているのは、「目標を持っていないと流されて生きていくことになる」、「人は新しい目標を持ち続ける事で、充実した人生を送ることができる」という言葉である。そして、自己の意識改革として、「PDCA サイクルを意識すべき」、「若者の可能性は無限大」であることも学んだ。初めて「簿記」の授業を受け、簿記の資格が役に

立つ仕事がしたいと思い始め、探したところ企業の「事務系」の仕事だと役に立つことが分かった。これからは色々な事に挑戦し、事務の仕事に就くために「簿記」以外にも役に立つ資格がないか調べ、先生方や先輩方から話を聞きたい。サークルにも入り、三蔵祭の運営委員にもなり、最近、バイトも始めたので、人との関わりが多くなった。今あるこの環境を利用し、授業で学んだ相手の心に寄り添い、親身に聞いてあげる「傾聴」の姿勢を身につけ、社会に出たときの対人能力を培いたい。

私がこのように考え方を考えることができたのは、「キャリアデザインⅠ」の授業のおかげである。

3. 私は将来、地元で銀行員となり、地域の色々な企業に融資をして、もっともっと地元を発展させたいと考えている。学業では経済や金融の知識を身につけ、銀行と地域がどのようにつながっているのか考え、地域社会についても学びたい。人口減少や少子高齢化が進む中で、どうやったら人が田舎にも来るようになるか考え、地域活性化について社会人になったら自分がやるべきことを導き出そうと思う。日商簿記などの資格も沢山取り、就職を有利に進めたい。「キャリアデザインⅠ」の授業で沢山の知識を得ることができたので、学んだことを実際にやってみたいと思う。さっそくアルバイトを始め接客や先輩とのコミュニケーションを通じ、授業で学んだ「自分を知る」を実践し、良い所はどんどん伸ばし、ダメな所は授業で学んだことを思い出して改善し、周囲にも相談し、もっともっと自分を成長させたい。私は草野球チームに所属し、チームプレーが社会でも大切であることを知っている。相手がいるから自分があるというのを忘れてはいけない。周囲から自分のことを気付かされ、そうした少しのことをきっかけに自分改革をやりたい。受講する前は面倒くさいなと思っていたが、授業を受けてみると将来の自分に役立つことばかりの内容で、来年の1年生にも、この熱い授業を受けて、福山大学の学生が一流の社会人になることを願い、自分の目標にもしたい。

6. 人間の行動の特徴を表す、「パーソナリティー理論」

「キャリアデザインⅠ」の授業においては、入学したばかりの1年生に対し、4月、5月、6月、7月の初期の段階で、一人一人の学生のモチベーションを最大限レベルアップするには、どのような授業展開を行えば効果的なのか常に探究している。そのためには昨今の多様な学生像について、どのように有効なアプローチが必要になるのか、学際的に心理学の視点からの考察も肝要である。

心理学では人間の行動の特徴を表わす言葉として、パーソナリティー (personality)、人格、性格、気質もしくはキャラクター (character) という言葉が使用される。人間を理解しようとするとき、このパーソナリティーという用語は大変に重要な概念の一つであり、「キャリアデザインⅠ」の授業においても、「自分を知る」即ち、「人間としての自分の特徴を知る」上で、キャリアデザイン

の本質にかかわる重要な概念として教授している。

パーソナリティーの定義について次に述べる。オールポート (Allport, G.W.) によれば、パーソナリティーの語源は、ラテン語のペルソナ (persona) で、古代ギリシャ時代に俳優が演劇する際、顔につけた仮面に由来する。故に、パーソナリティーという用語は、目に見える表面的な性質をそれとなく感じさせるが、現代の心理学においては、パーソナリティーは、個人の独自性と統一的なまとまりを持つ行動体制という意味が強調されている。即ち、「パーソナリティーとは、ある個人の行動は環境への適応において、その人らしい独自の一貫した適応行動様式があり、たえず遺伝と環境の相互交渉により、変化、発達して再体制化されていくものである」と把握できる。

パーソナリティー理論の中で、類型論は、一定の原理に基づき、パーソナリティーを複数の典型的な型で代表させ、その構造を明らかにする。さらに、類型論は多様なパーソナリティーを分類・整理し、パーソナリティーの把握と研究をより分かり易くしている。類型論は、精神の全体性、統一性を重要視するドイツやフランスの人間学・性格学の考え方を背景に、主にヨーロッパで発達した。

ユングの類型論においては、外向型・内向型の類型とともに、精神の主な機能として、思考、感情、感覚、直観の四つの機能類型を考え、この心理的な機能類型と外向型・内向型の態度類型を組み合わせ、以下の八つの性格のタイプを提唱した。

- ① 外向的思考タイプ
- ② 内向的思考タイプ
- ③ 外向的感情タイプ
- ④ 内向的感情タイプ
- ⑤ 外向的感觉タイプ
- ⑥ 内向的感觉タイプ
- ⑦ 外向的直観タイプ
- ⑧ 内向的直観タイプ³

7. 自分を知る：性格から自分の強みを考える

福山大学の「キャリアデザインⅠ」の授業においては、ユングの性格のタイプ論にも関係し、次のような論点で講義を行っている。

普段、自覚している自分の性格から、強みを発見することもできる。自分の性格を良い、悪いで判断せずに、むしろ個性や持ち味として把握し、長所や良い部分は伸ばし、自分の強みにして

³ 社団法人 日本産業カウンセラー協会(2004),『産業カウンセリング入門』(改定第2版) 社団法人 日本産業カウンセラー協会, pp.166-169.

いくことで、短所や欠点は小さくなる。自分の性格については、教員、友人、家族などに質問し、他者から見た自分を知ることが、これからの自己の成長への貴重な糧となる。授業では、性格から見えてくる「自分の強み」として、内向・外向、行動・熟慮、堅固・柔軟に分けて、学生がどのタイプに属するのか質問した上で、各タイプについてアドバイスを行っている。学生にとっても、人として自分の特徴を知ることが、とても興味深く、ほぼ全員の受講生が真摯に学修している。

一例として、内向タイプ・外向タイプの学生には、次のような助言を行う。

内向タイプの方は、内省的である、落ち着きがある、人と深く付き合う、という長所がある反面、アドバイスとしては、「自分への深い洞察の一方、外への関心が向きにくい側面も。じっくり人と付き合うだけでなく、人の輪を広げていくことも心がけていこう」。外交タイプの方は、社交的である、活動的である、興味・関心が外へ向かう、という長所がある反面、アドバイスとしては、「人と上手に付き合う一方、八方美人ととらえられる危険性も。落ち着いて、たまには自分について見つめてみることも必要」という授業展開となる。

さらに、性格からだけではなく、経験や能力・行動からも、自己理解を深く促し、今の自分にとって、伸ばしたい強み、克服したい課題を、各学生に自己分析してもらい、将来の自分の「社会的強み」につながるように導くのである。

「社会的強み」とは、「自己コントロール力」としての意欲・自主性・適応力・自己統制力・ストレス耐性・持続力、「対人関係力」としての協調性・共感力・発信力・説得力・指導性、「社会的な態度」としての創造的態度・現実的態度・情報収集力・論理性・規律性・国際性・IT適応力で構成される。

このような「社会的強み」のすべての項目を自分の強みとして伸ばす必要はなく、得意なもの、苦手なものを把握し、学びや課外活動を通して、自分らしく「社会的強み」を伸ばす行動パターンを身につけていけるように教授している。

8. 多様な学生達の、モチベーション高揚への考察

H29 前期定期試験で「キャリアデザインⅠ」を受験した学生の解答から、今、本学経済学部の多様な学生達が、これからの大学生活において、どのようにして自己のモチベーションを高め、自己の将来像に向かって、どのように「人間力」を伸ばそうと真摯に考察しているのかを紹介したい。

1. 私は、この「キャリアデザインⅠ」の授業を受けて、将来のことを考える大切なきっかけとなった。将来の夢は公務員になり、福山市役所に勤めることである。授業を受け、この夢に対して何もできていないことに気付いた私は、将来、絶対に後悔しないために、今、どれだけ経験を積むかが、これからの道を創っていくと思う。最初の授業でPDCAサイクルを聞いた時、

何のことか分からなかったが、これが何をやる際にも基礎になることだと気付いた。正直、私は、今まで消極的な人生を過ごしてきたが、この授業を担当する先生が、就職活動をした際、他大学(東京大学)の学生だけの試験会場にもかかわらず、会社の人に頼み、面接を受け、内定をもらった話には、本当に心が動かされた。私も先生のように自発的、積極的な人になりたい。先生には、『女子学生のキャリアデザイン』についても講義して頂いた。特に、本学ですべての履修科目の平均点が99点を取得した女子学生については、地元有力銀行に総合職で内定され、私の大学時代の目標となった。この女子学生のように、圧倒的な学業成績を取り、自信を持って就職活動をしたい。そのためには在学中に10個以上の資格を取り、外国語の検定、ビジネス能力検定にも挑戦したい。この授業のおかげで「やる気」と「希望」が高まり、この希望を胸に、これから4年間、大学で精一杯努力していく。

2. 私は、「キャリアデザインⅠ」の授業を受ける前と、受けた後では、自分の将来の事についての考えが大きく変わった。授業を受ける前は、特にやりたい仕事もなく、ただ会社に就職するだけだと思っていたが、この授業で自己の将来像を考え、それに向かって頑張る事が大切だと教わった。確かに、私は自分の将来のことを全く考えておらず、そのため何を頑張ればいいのかも分からず、ただ毎日学校に行くことしかしていなかった。自己の将来を考える第一歩は、私は何に熱中できるのか、何が好きなのかを考えることだと思った。そこで一番出てきたのは中国語だった。私は高校3年でHSK3級を取得し、さらに上の級を目指し、中国人留学生が多く検定の一部負担もある福山大学に入学した。しかし、初めて中国語の授業に出たとき、想像以上に自分に中国語の知識が無いことに驚いたと同時に焦りを感じ、HSKの上の級を取得するのは無理ではないかと思い始めた。しかし、「キャリアデザインⅠ」の授業で自己の将来像を考える大切さを学修したことを思い出し、まだ諦めるのは早いと考え、将来の夢・やりたいことがあれば、そこをゴールにして、今、何を頑張ればいいのか自然と分かるようになった。私の大学4年間の目標は、HSK6級の取得と中国への留学である。私は、1年生で中国留学のための学修と、留学資金のためのアルバイトを頑張ろうと考えた。勿論、他の科目も必死に頑張る。さらに、コミュニケーションが苦手な私は、「一人前の社会人になるためには大学で何をすべきか」というテーマのグループディスカッションに参加したが、自分は発言できないのに、他の人は沢山手を挙げていて驚き、圧倒された。その際、ボランティアに参加するという意見が出され、とても説得力があった。何事にもチャレンジしなければ始まらない。限界を自分で決めてしまえば、まだあるかもしれない自分の可能性を発見できないかもしれないと思い、ボランティアに積極的に参加することにした。「キャリアデザインⅠ」の授業で、自己の将来像を考える大切さを教えてもらっていなかったら、私は、目標もないまま毎日を過ごしていたと思う。

3. 高校2年の夏から大学入学時に至るまでの私は、自分がやりたいことも、目標も、自分自身

のことも理解できておらず、「早く決めなければ」と思うばかりで、焦りや不安から考えが煮詰まってしまっていた。私のこの煮詰まっていた考えを軽くしてくれたものが、月曜5時限の「キャリアデザインI」の授業であった。

まずは、自分自身について知れたことが一番大きなものであった。教科書の第9回、第10回に取り組んだ授業では、自分自身の過去、現在、能力、強みについて振り返ることができた。正直、WORKの空欄を書くのに凄く悩み、自分のことなのに何故書けないのか。そこで、自分で自分自身のことが分かっていなかったのだと気付かされた。第7回の自己紹介については、始め、全然書き出せずにいた。だが悩みぬいて文字に書きだし、それを読んでみて「私」というものが少し理解できたような気がした。過去の自分を振り返り、今を見つめてみることで、私は「人とかかわる仕事」につきたいのだと分かった。まだちゃんと「これ」とは決まっていなかったが、まずは、もう少し自分のことを見つめ直すことから始めていけばいいと分かったことは、私の中でとても大事なことであった。私自身が大きく成長していくためには、まずは私自身を理解すること。それを焦らず確実に続けていって、将来の仕事を決めたいと思う。私は、「資格を取ること」＝「未来の自分への投資」なのだと思うことにした。私はこれから、日商簿記検定、MOS検定、秘書検定を取ろうと思う。資格は努力した分、自分の強みに確実になる。この「キャリアデザインI」の授業で、最も使われたであろうと思われる単語、「PDCAサイクル」を手本に、まずは2年生の夏までに勉強を積み、検定を受けようと思う。

大人になったら仕事が忙しく、資格を取る暇などないので、大学生の今のうちに、地道に努力を重ね、資格取得を計画・実行する。

大学4年間、将来について真剣に考える機会をくださり、本当に感謝している。

先生がよく話しておられた、「若者の可能性は、無限大！」を頭に残しながら、悔いのない大学4年間を過ごしていこうと思う。

9. 女子学生のためのキャリアデザイン

日本社会では、人口減少・少子高齢化の影響で2025年には、65歳以上の高齢者は総人口の4人に一人になることが予想されている。さらに、このまま人口減少が進行すれば、50年後には現在の人口より3割減となることが予測されている。

人口減少・少子高齢化がもたらす日本の国家的課題として、現在、厳しい労働力不足に直面しており、生産年齢人口(15歳から65歳)は、1999年代をピークに減少を続けており深刻な社会問題となっている。

このような状況下、これからは男女の性別にとらわれず、健康な男女はともに働き、日本社会の経済基盤を支える貴重な労働者として、男女ともに自らの能力を最大限活かしながら働き、ともに収入を得て、男女が共同して家事、育児、介護など家庭生活における様々な役割・責任を分

担しつつ、ともに支え合って生きていく「男女共同参画社会」が、今、求められる時代になっている。

このような社会環境の下では、大学進学率で男子を上回る、高等教育を受けた優秀な女性の増加に伴う貴重な労働力を社会で有効活用し、女性の存在感を一層高め、活躍・成長への環境を整えていくことは、今後、高学歴の女子学生の就業力維持がますます持続可能となることにつながり、未来への豊かな日本社会の再生に、大きな希望をもたらすものである。⁴

女子学生のキャリアデザインは、自己の願望にとどまることなく、上記のような社会的背景を踏まえ、自分にも社会にも意味あるキャリア構築を意識すべきである。このように自分自身で、自己のスピリット・イノベーション(意識改革)を起こせる女子学生が増え続けていくことが、将来の日本社会に大きな変革をもたらす原動力となろう。

従って、福山大学の女子学生も自己の資質・能力と大学での学びを、将来、最大限生かし、自分にも社会にも意味あるライフ・キャリアの構築を、大学1年生の時から長期的視点で考察すべきである。

10. 女性の就業力が持続可能な社会の意義

結婚、出産、育児、介護などにより、女性のキャリア形成は男性と大きく異なる。

福山大学1年生の女子学生にとっても、長期的視野で入学後の初年次から、女性特有のライフ・キャリアの選択を真摯に考察してもらうことを、「キャリアデザインI」の講義で教授している。

以下に、女性が社会で自立して就業できる意義を述べる。

まず、第一に「経済的自立」をもたらすこと。一般的に、女性は結婚後に男性に扶養されることを普通に考える人が多く、経済的に男性に依存してしまう傾向にある。しかし、昨今リストラなどで、男性が突然職を失い、家庭崩壊の危機に直面することも生じるなど、人生におけるリスクも想定すべきである。故に、女性が職を持ち、経済的に自立していることは、人生の危機管理にもつながり、人生のリスクから自分を守り、精神的にも強く、誇りを持てることにつながる。

第二は、「自信と生きがいの創造」である。社会で働くことにより、自分にはやるべき仕事があるという自分自身の存在感を持って、職場の一員として企業や社会に貢献している喜びを感じることができる。

第三は、「様々な人々との出会い」があることである。家庭に入れば、人との出会いも少なく、家事や育児に追われる毎日となり、視野も狭くなりやすい。就業すれば、様々な人々との出会いや人間関係が生まれ、日々、多くの事柄を学ぶことにもつながる。

⁴ 宮城まり子ほか(2016),『大学生のためのキャリアガイドブック Ver.2』北大路書房, pp.124-125.

第四は、仕事を通じ「職場での緊張感や、生活に張りが持てる」。職業には責任感が生まれ、その仕事を進める過程における責任や役割を果たす上で、やりがいや達成感を得ることができる。

第五は、「仕事自体が人を最も成長させる」ことである。仕事を充実させるために、日々、人は努力を続けるが、この努力が人を一層成長させる要因となる。仕事を通じ、知識、スキル、経験、人脈を得て、自己の強みや専門性も磨くことができる。⁵

一方、日本の政治・経済・社会は、世界的にみても、まだまだ女性管理職の少ない、女性活躍の場の少ない社会であり、その意味では依然として発展途上の過程にあるといえる。

男性とは異なる、女性の豊かな「人間力」ともいえる、細かな感性、創造性、包容力、人間愛、優しさなどの多様な能力・資質を、日本の、そして、世界の未来に向けて、大きく積極的に活用していくことは、今日、加速している 21 世紀のグローバル化社会の中で、時代が求める肝要な政策課題といえる。

1 1. 学生の主体性を積極的に育むキャリア・カウンセリング

キャリア・カウンセリングの社会的意義は、クライアントとなる学生に、職業の紹介・斡旋や、テクニカルな就職支援のサポートを行うことではない。クライアントの学生が自ら抱える現在の不安や悩み、そして、これまでの境遇についての後悔やこれからの進路についての迷いなどに対し、まずは「傾聴」の姿勢をもって、相手の心に寄り添う形で、相手の学生を全面的に受け入れ、親身になって相談に乗ってあげることで、そこに芽生えるお互いのラ・ポール（信頼）に基づき、クライアントである学生の自主性を積極的に引き出すことにある。

これからのライフ・キャリアについて不安を抱く学生達は、併せて、さまざまな精神的悩みを抱えている。故に、キャリア・カウンセリングの過程においても、このような「メンタル面のケア、心理的問題の解消へのサポート」は、クライアント（学生）との信頼関係を築く上で、核心的事柄として位置づけられる。

成熟社会・飽食時代に育った、今日の日本の大学生に見られる、主体性・積極性・自立性の欠如、社会が求める人材とのミス・マッチ、自己の将来や人間関係への不安などについて、「個」や「個人のパーソナリティー」を大切にすキャリア・カウンセリングのアプローチを、講義やゼミ授業を通じてのキャリアデザイン（人生設計）と融合させ、双方の相乗効果を生かす手法を用いながら、一人一人の学生が将来に向けて自立していくために、その相乗効果の効能を最大限生かしていくことが、上記のような日本社会が現在抱える問題の解決に資することにつながると確信する。さらに、日本社会が求める、将来、一人前の社会人としての自覚や責任を担える学生を、大

⁵ 宮城まり子ほか（2016）、『大学生のためのキャリアガイドブック Ver.2』北大路書房、pp.130-131

学が世に送り出すことに貢献することになるといえよう。

一方、高等教育においては、大学設置基準法が改正され、平成 23 年度から大学教育の一環として、「社会的・職業的自立に関する指導等 (キャリアガイダンス)」が実施されることになった。これは、学校教育の最後の砦ともいえる大学において、授業やその他の各種支援を通して、将来の社会の一員としての自覚や責任を、学生一人一人が自ら担える『人間力』を培うことを、大学教育に求めるものであるといえる。

この大学に求められる社会的役割を全うするには、一人一人の学生の主体性を引き出すことが肝要であり、そのためには入学の早い時期から、将来の社会進出・職業を目標とする自らの積極性、計画性、行動力を、大学時代の初年次から身につけていくことが、学生のとても大切な精神的支柱となる。⁶

上記を念頭に、福山大学においては、大学入学直後に全ての 1 年生が受講する、全学必修科目「キャリアデザイン I」が存在するのである。

1 2. キャリア・カウンセリングとキャリアデザインの相乗効果

近年、若年のフリーター、若年無業者等の増加にみられる、先行き不透明な現代社会において、大学生を含む若者の社会への関心はますます薄れていく傾向にある。この背景には、親への依存の長期化、若者の社会的自立の遅れもある。さらに、進路葛藤に関する青年期のモラトリアム (猶予期間) や若者の社会的孤立、職業への疑問、社会への不適應と健康障害なども要因となっている。

カウンセリングと教育の共通点は、個人の育成・成長をはかる視点である。しかし、カウンセリングの目標は個人の人格を尊重し、個人を人間的に成長させることを目標にしていることに対し、教育は個人が社会人・組織人として育つことを目標にしており、要は卒業後、社会に適應できるための社会化が、大学を含む学校教育における目標である。さらに、カウンセリングにおいては主に情動面に働きかけ、気づきを大切にするが、教育においては主に知的な面に働きかけることを重視する。

このようなことから、大学生のためのキャリア・デザイン (人生設計) については、キャリア・カウンセリングの手法を駆使する形で、「個」を最大限に尊重するそのメリットを、全ての担当科目について教員が授業を展開する際、また、個別指導などを行う際に、教員が一人一人の学生に対応する接し方として、取り入れることが大切である。

福山大学における「キャリアデザイン I」の授業においても、「個」を大切にするキャリア・カウンセリングのその効能を、一人一人の学生の人間的成長に反映させることが、キャリアデザイン(人生設計)についての本質的な教育上の成果を高めることにつながるであろう。また、この事が、

⁶ 中村博(2017),「大学生のためのキャリア教育の社会的意義」『福山大学経済学論集』第 41 巻第 1・第合併号, pp.20-21.

日本社会で最も課題になっている、大学生にとって自己の将来像に対する意欲・向上心を、どのようにしたら高めることができるのかという問いに、答えることにつながるといえよう。⁷

13. おわりに

現在、高校卒業後、大学・短期大学への進学率は50%を超え、大学は「全入時代」を迎えている。この「全入時代」に大学に入学してくる学生達は、高い向学心や志、そして目的意識や思考力・行動力を備えて進学してきたとは言い切れないのである。ここに「全入時代」を迎えた、日本の大学教育についての課題が浮上してきたといえる。日本社会の少子高齢化、人口減少、特に18歳人口の減少に直面している日本の大学間では「生き残り」をかけて、入学者の増加に熾烈な競争を展開している。

このような社会的背景の中で、現在、大学は入学してくる学生達の「生き方」や「価値観」の多様化に直面し、学生の学力格差や希望格差、夢・目標の欠如、主体性・協調性・自立心の欠如などに、どのように対処したらいいのか善処できず、これが喫緊の課題になっている。

もう一つは、日本の政治・経済・社会が、世界の「グローバル化」へ一段と加速していることである。グローバル化への歩みは、大学生の「生き方」や「価値観」にも大きな影響を与え、企業経営者や社員の既成概念、雇用マーケットなどにも様々な変化をもたらしている。

このように「全入時代」の日本の大学を取り巻く社会環境や世界は、ICT革命(情報通信革命)が想像を超えるスピードで日増しに変化していくグローバル社会であり、この21世紀のグローバル社会が大学生に求める「生きる力」は、まさに目まぐるしい変化と多様性に適応できる能力、他者と価値観を共有できる寛容さと柔軟性、そして、他者との協働性、さらに「個」の「生き方」を大事にする自律的能力といえよう。

このような社会の移行期に、日本の大学生に求められることは、将来の知的社会人を目指し、大学における学びを通して、豊かな知識を身につけ、技術力を高めるためのスキルアップを常に怠らないことが重要になることである。すなわち、卒業後の自己の未来を切り開くために、そして、豊かな人間形成へのキャリア構築のために、学生個人のイノベーションともいえる、「スピリット・イノベーション」(自己の意識改革)が肝要である。⁸

福山大学経済学部においては、H29前期定期試験で必修科目「キャリアデザインI」を受験した、経済学部1年生全員の解答用紙からも理解できる通り、この授業を受けたことで、自己の将来像への夢・目標について、自らの意識や考え方が大きく変化したことが記されており、自分自身、

⁷ 中村博(2017)、「大学生のためのキャリア教育の社会的意義」『福山大学経済学論集』第41巻第1・第合併号、pp.21-22.

⁸ 中村博(2017)、「大学生のためのキャリア教育の社会的意義」『福山大学経済学論集』第41巻第1・第合併号、pp.24-25.

これからの大学生活、社会進出に向けて、今、何をすべきか、社会は何を学生に求めているかを真摯に自覚し、これからは能動的に自己のキャリアデザイン(人生設計)に真摯に取り組み、着実に行動を起こしていることが明記されている。

この事実が、大学生のためのキャリアデザイン、並びに、大学生のためのキャリア・カウンセリングの社会的意義の証左といえる。

参考文献

- [1] 福山大学キャリア形成支援センター(2010),『Career Design Note 1 Fukuyama University』福山大学キャリア形成支援センター.
- [2] 長尾博暢ほか(2016),『大学生のためのキャリアガイドブック Ver.2』北大路書房.
- [3] 社団法人 日本産業カウンセラー協会(2004),『産業カウンセリング入門』(改定第2版)社団法人日本産業カウンセラー協会.
- [4] 宮城まり子ほか(2016),『大学生のためのキャリアガイドブック Ver.2』北大路書房.
- [5] 中村博(2017),「大学生のためのキャリア教育の社会的意義」『福山大学経済学論集』第41巻第1・第2合併号.

The Social Significance of Career-Design and Career-Counseling for The Sake of University Students

Hiroshi Nakamura

Abstract

In Fukuyama University there is a compulsory subject named “Career Design I” that have to be learned by all freshmen as the first year’s education of this university. The teaching-aim of this compulsory subject is to bring up the students’ abundant human nature and to cultivate the foundation of a member of society in future.

In the class of a compulsory subject of “Career Design I”, students of Fukuyama University systematically learn the contents of a designated textbook, named “Career Design Note I - Fukuyama University”, made by Fukuyama University with subsidies from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

Furthermore to obtain good results of the teaching-aim and to raise students’ motivation, dialogue, case study, questions and answers, presentation based on Work of the textbook, a trial personal interview, and group discussion are positively introduced as the method of “Active-Learning”.

As a result almost all students feel actually that “A Lifestyle” of each student is changing from meaningless and useless one until now to a new lifestyle that have a sense of purpose and significant time every day. Therefore, almost all students are so surprised that they are starting to walk toward self-realization. And they are very pleased with this great change.

The above-mentioned matter can be verified by the examination papers of 261 freshmen of Fukuyama University who took an examination of the required subject of “Career Design I” during the first semester examination in 2017 of Fukuyama University.

With the above-mentioned examination papers we can also understand that these freshmen of Fukuyama University could firmly realize for their own selves that it is most important for them to make oneself who can challenge each small goal making the best use of PDCA- cycle (Plan, Do, Check, Action) toward their dreams and aims in future in order to become an independent member of society.

With these facts it is evident that Career-Design for The Sake of University Students is Significant Socially.

Meantime, Career-Counseling is not the technical support for job-hunting like mere guidance and consultation on an employment examination, as well as introduction and mediation of an occupation.

Career-Counseling is drawing close to a student's heart with the posture named "Keichou" in Japanese to listen to him, receiving all of him. With "Keichou" it is possible for a counselor and a student to gradually establish a relationship of mutual trust, and to draw student's positive thinking, subjectivity, and constructiveness from his subconsciousness.

When we make good use of this effectiveness of Career-Counseling of valuing individuality for a lecture or a seminar, the synergy effect between a lecture or a seminar and Career-Counseling is available.

Namely, this synergy effect means that a professor and almost all students can expect good results of the teaching-aim for a lecture or seminar, and also means that mutual trust between a professor and almost all students will be available.

With these facts it is evident that Career-Counseling for The Sake of University Students is Significant Socially.